

吉祥寺生活放浪続く

文人の 武蔵野

金子光晴（1895～1975年）が終の棲家を吉祥寺に構えた1938年の翌年、太宰治（1909～48年）は終の棲家を三鷹に構えました。金子のほうが年長ですが、ふたりとも同じ頃に武蔵野に居を定め、妻子と暮らし始めています。

金子光晴 ②



成蹊学園のケヤキ並木。金子は自宅近くのこの並木を好んで散歩した（武蔵野市で）

にデビューします。それから15年後に家族と暮らす家を持ち、創作意欲も盛んになりましたが、吉祥寺の自宅に落ち着いていたわけではありませんでした。

両者の評伝をみると、太宰が山崎富栄と入水したのと同じ年に金子は大川内令子と恋愛関係になっているようです。太宰とは違って金子の場合、三鷹から吉祥寺にかけて

移動のスケール感は異なりますが、太宰も同様です。主に東京近辺の放浪を経て所帯を持ちますが、自宅に落ち着くことはありませんでした。

の二帯を明らかに舞台にした作品をたくさん書いたわけではありませんが、「武蔵野（習作）」という一編の詩を残しています。

「武蔵野（習作）」の成立背景は複雑です。最初に活字になったのは51年、戦後のことです。創元社版「金子光晴詩集」に「大腐爛頌」（未刊詩集）の一部として掲載されました。

「大腐爛頌」は、金子によると「こがね蟲」が「光」であるのに対して「影」と言えるような詩集でした。「こがね蟲」も「大腐爛頌」も、19年から20年にかけて滞在したベルギーで書かれたものでした。

た。「こがね蟲」とともに刊行予定だったのが、「大腐爛頌」の草稿を電車の中に置き忘れたそうです。後に世に出た「大腐爛頌」は、思い出して書き起こしたものと考えられます。その一つが「武蔵野（習作）」というわけです。自ら復元して自選の詩集に収めた、思い入れのある「習作」だったと言えます。

それでは、この「武蔵野（習作）」とは、どのような作品なのでしょう。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

* 過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。



トフォンはQRコードから。